愛知の博物館　No.29

注口土器　縄文晩期

目　次

○世界のミュウジアムの仲間たち
ICOM-MEXICO-80大会記……広瀬　鎮……2
○表紙写真……荒木　実……6
○事務局だより……6

世界のミュウジアムの仲間たち
ＩＣＯＭ-MEXICO-80

イコム（ＩＣＯＭ）第12回大会に参加して
総会見参記

広瀬　鎮

はじめに

メキシコ・シティにこんなに沢山の世界中から博物館関係者があつまろうとは思ってもいませんでした。

メキシコ・シティに到着した昭和55年10月24日、空港にはイコムメキシコ国内委員会のメンバーが受付けを設けて、会員の到着を出むかえていました。夜ふけて予定されたホテルにつきましたが、メキシコも空港と都心との交通は混雑そのものでした。

翌日は、参加者登録です。巨大な国立オディトリオへさっそく出かけていきました。アジア大会以来のなじみのインドネシアのストウルガーさん、タイ国バンコックからのアリさん、（このアリさんは日本へ博物館職員研修生としてやってきたことのある若手の学芸員さんです。）等にぱったり出会いました。

諮問委員会や、執行委員会へは、オブザーバーとして出席しましたが、熱意のあふれた各国の代表委員、そして、ユネスコ事務局長のモンリアールさん、さらにアジア支部のスコッチマンさんにおめにかかって、とても楽しいお話ができました。ＩＣＯＭ大会には、私は1970年のパリー・グルノーブル大会以来の参加ですが、この間の世界の博物館界の発展はめざましいものがあります。また、大会開催前にひらかれる諮問委員会でおみかけしたレイビス氏、執行委員会でのランディ会長共に国際博物館界での大先輩は生き生きと活躍しておられました。

大会の始まる前夜は、メキシコ・シティのアラメダ公園で古い歴史を持つメキシコそして著しく文明化した現代メキシコの空気をうんと吸ってすごしました。酸素不足と聞かされた高所のメキシコですが、10月末とはいえ夜から朝へかけては猛烈に寒いと感じました。今回の会議では、法政大学の鶴田總一郎教授、ロスアンゼルス市、オリエンタル・スターディ大学の吉田幸平教授と御一緒になれましたので、日々が楽しく、意欲的にすごせました。久しぶりにお会いしたアジア地区博物館の方々はとくにはり切っております。インドの人間博物館のロイ博士、バングラディシュのハック博士などとても精力的に活動しておられました。このアジア博物館会場が国立文化博物館でおこなわれたこと、とくに教育と文化活動の国際委員会、研究会のひらかれた場所であったこともあって私には印象が深いのです。会議ではボース氏が議長を務めていました。ボースさんのきらきらした瞳も、カルカッタ、コロンボ会議以来なつかしいものです。〝ジスタイム、レッ・ディスカッス〟これもまた聞きなれたボース氏の早口の言葉でした。鶴田總一郎さんはアジアの会員からも大へん評価されていて、沢山の会友にとりかこまれて楽しそうでした。同氏はこの会では運営委員の一員にえらばれました。アジアの博物館の職員、そしてイコム会員の一人としてとてもうれしい思いです。

では、イコム第12回大会中の総会の様子を以下に御紹介しましょう。いろいろと感じたこ

とをのべさせて頂ければ幸いです。

大会・総会にて

62ケ国、1500人以上の参加者を一堂にむかえいれた、国立オーディトリオは、チペルテペック公園の一角を占め、実にみごとな会場でした。10月27日の朝9時30分、大統領、Jose Lopey Partillo氏の列席を賜わり大会の開会が宣言されました。ＩＣＯＭランディ会長の挨拶が始まりました。いつの場合でもそうなのですが、大会の開会式は感銘の深いものです。大会テーマが、「文化遺産と博物館の責務」であるのも、今や世界の博物館がいかに人類の文化遺産を共有の財産として重視せねばならないか、そのためにしなければならないのは何かについて力強く宣言しているように思えます。「国際平和」の維持こそが、人類の遺産を後世に伝える鍵なのですが、〝お互いの理解の「精神の永遠」を祈ろう〟とランディ会長が結びますと大きな拍手がおこりました。同時通訳で、英語、スペイン語に訳された会長の挨拶は会員の心を打ちました。こうして国際会議がはじまったのです。ソオラナ、メキシコ公教育大臣や、バズクエズ人間関係事業大臣の講演が続き、文化遺産の歴史性、博物館機能との深いかかわり合いについて論じられ出席者の間に多くの感銘をひきおこしました。隣席のメキシコ文化博物館の女子職員さんが、時おり話しかけてきました。〝この会議をどう思う？〟彼女の気持はよくわかります。大会はだんだんと盛り上ってまいりました。開会式のおごそかな雰囲気にひきつづいて大会の議事がてきぱきと進みます。各委員会役員、事務局の準備のほどがわかります。前日までの受付け、登録、資料配布、大会情報の伝達にはまだまだ不満のあつまった大会の出発でしたが、次第に運営も調子がでてきたのでしょう。ＩＣＯＭ大会諸報告、各委員会報告そして過去3年間のユネスコ、国際諸委員会の実践活動が報告されます。アジア支部の活動が大変活発であることが私をよろこばせます。これまでＣＥＣＡ（教育文化活動）、や自然史科学博物館関係委員会の諸交流を通じて密接であったとはいえ何しろ3年に一度の大会です。ＩＣＯＭの規模の拡大にはただただ驚くばかりです。

ティティワカン遺跡

メキシコ博物館協会の配慮で会議期間中にいくつかの施設見学旅行がこころみられた。各国の博物館仲間とのティティワカン遺跡訪問は、得るところが大きかった。古文化財の修復、保存へは国をあげてとりくんでいるのがよくわかった。最大の建造物である太陽のピラミッドへは一息でのぼった。紀元2世紀以降繁栄を誇ったといわれるティティワカンの偉大な都市国家の遺跡、廃墟はまさしく「神々の都」の名にふさわしい。

大会、全体会議の詳細は、ＩＣＯＭ日本委員会や、ＩＣＯＭニュース等を通じて紹介がなされると思いますのでここでは、私の印象を中心としてのべさせて頂きましょう。とくにこの日行なわれたキーノート、スピーカーの話題提供とパネル討議は大変格調の高いものでした。自然文化財という言葉が、アメリカ合衆国ミズリー植物園のR.ラアベン氏から発言されました。この「Natural Heritage」こそ、自然史博物館の守らねばならぬものなのでありますが、彼は次々と博物館に科せられた役割りを具体的に列挙されました。かねがね、動物園、植物園の自然文化財保護に関してとくに強い関心をもってきた私には極めて共鳴を覚えさせられた講演でした。

フランスのJ.リガード氏も、メキシコのP.バズクェズ氏も、「文化遺産、生きる文化」そして「将来と未来の文化財」についての意見を述べました。博物館の社会への働きかけの増大

と国家による文化財保存行政への期待が強く主張されたのです。文化財の永遠性についてバスクエズ氏は古くからメキシコに伝わる民謡の一節をひろうしてくれました。昨日と今日の人間の生き方にかかわる問題として文化遺産をとらえた氏の講演に一同強く胸をうたれたのでした。

パネル討議は、意欲あふれる講演がつぎつぎと続いたのですが、途中から退席の会員があらわれ、おわりの方になると残念なことにかなりの参加者が姿を消していました。これは会の運営上の時間配分等にも問題があるのでしょうが、おしい気がしてならないのです。
この講演はいずれ刊行物となって紹介されるにちがいありませんが、各パネラーの真剣な訴える表情を私は忘れることができません。

パネラー大いに語る

カナダのレミュー氏は「自然文化財問題」を、インドのボース氏は、「科学遺産について」、メキシコのコナレ氏は「民族文化遺産について」ソ連のイワノフ氏は、「歴史文化遺産について」をとりあげ、それぞれの演者はこれら諸遺産を博物館の機能と結びつけて考察したのです。レミュー、カナダ国立博物館長とは会議中お話する機会がありましたが、彼は、絶滅種の生物に対する人類の責務について切々と訴えつづけました。眼鏡ごしに鋭く光る眼を私共にむけ熱っぽく話しかけてくれました。〝自然史博物館は地球上の自然遺産を正しく継承し保存するための教育活動を充分に果す場所ではあるまいか〟、氏の講演がおわりました。私も大きく拍手を送りました。いそいで戻って行かれるレミュー氏に私は声をかけ、講演のすばらしさ、そして熱意に敬意を表しましたが、同氏も気軽に私に答えてくれました。〝いよいよ自然史博物館の時代ですね〟と云い、〝君の講演も期待しているよ〟と力づけてくれたのです。

さて、ボース氏はかねがねインドの高い文化に世界の人々の注目をひきつけたいと念願していました。今回の講演は科学博物館と科学文化遺産を結びつけたユニークな論であり、メキシコのコナレ氏は民族学文化遺産と博物館機能とのかかわりについて鋭い指摘を行ないました。いずれの講演にも生涯教育にかかわる博物館活動、地域社会、そして国際社会を意識した現代博物館論が随所に伺われます。コナレ氏の講演を通じてメキシコの博物館行政のしくみの一端が理解できました。ソ連のイワノフ氏は英語による「20世紀の文化遺産と歴史博物館」と題しての講演を行なったのですがどこの国でも一緒だなあと私が思ったのも、歴史博物館中心に国は博物館を考えるという点に触れたからでもありますが、平和や、民主主義に徹した博物館機能論がここにも打出されていたのです。国が博物館をいかに重視しているかをいやというほど知ることができました。

すっかり暗くなってしまったチペルテペック公園の夜気が体にせまってきます。会場のオーデイトリオから外へ出た私の目には、明日からの国際委員会のひらかれる自然史科学博物館の方向にあたる空が、何となく明るく感じられましたが気のせいだったのでしょうか。ホテルへの帰路、心の中では元インド支部のG.モーレイ博士の最終スピーチはよかったなあと思いつづけていました。90才に近いモーレイ博士はまだまだお元気で、エネルギーをぶつけておられました。彼女も又日本の博物館のファンでそして、博物館事業に一生をかけている人なのです。

ひきつづいて、ＩＣＯＭ1980年の総会はメキシコ国立芸術院でひらかれました。先夜メキシコ民族舞踊をふんだんにみせてくれたこの国立芸術院の舞台、壇上に会長他役員がずらりと登壇しました。会場は満席の盛況で、ランデイ氏が議長となり開会、議事が上提され、事務局長よりの会務報告がなされ、ユネスコ関連の諸報告、そして関係委員会からの報告につづいて財務報告がなされたのです。この会議は11月２日、３日と続けられ、1981年から1983

年にいたるイコム、プログラム委員会からの提案、国際委員会からの3年計画等が続いて提出されました。財務規模もいよいよ増大していることが良くわかります。国際諸組織との関係も深まり加盟国も120国に近づこうとしております。会員連携や、委員会協力もさらに密にならざるをえません。各国委員会も充実してきました。アフリカ諸国の博物館への期待がいかに大きいか、痛切に感じます。アジア支部の活動は日本委員会の協力もあって力強く進展しています。アジアの博物館の活動への高い評価には大会出席者の一人として心づよく、うれしいものでした。日本国内の多くの先輩、会員、諸館員の方々の努力ともいうべきでしょう。とくに日本委員会の福田委員長の御努力も大へんなものであったと思います。

財務委員会よりの財政計画などが、決定され、大会決議が採決されます。意見交換、討議にも熱が入ります。私にはＣＥＣＡ委員会の積極的な提案によった博物館と身障者に関する提案がとくに強く心に残ります。

福田委員長が執行部委員に選出

総会もいよいよ大詰です。第13回大会はロンドンと決定され、大会旗がメキシコからイギリスへ移されました。今回の第12回大会役員や、関係者への謝辞や贈物が贈呈されます。これはなかなかうるわしい慣例となりました。吉田幸平会員とこうした国際社会でのさまざまなセレモニーのあり方についていろいろと話しあいました。

ＩＣＯＭ会長と執行部委員の選出が、出席会員一人一人の登壇投票でおわり、いよいよ開票です。福田繁イコム日本委員会委員長が第5位で執行委員に選出された時、私たちも本当に嬉しい気持で一杯でした。日本委員長のお仕事も大変でしようが、国際博物館人の絶大な支持をえられたのです。私たちは先生を囲んで心からのお祝いの言葉をのべさせて頂きました。総会決議は心して読みますと、国際博物館界の現代の良識が、そして力強い国際博物館の主張の数々がみうけられます。こうして第12回大会も無事終了し、ひきつづき国立芸術院でのカクテルパーティでいよいよおわかれです。カクテルパーティでは多くの会員から声をかけられました。メキシコのロザアリア・ゴンザロスさん、自然史博物館のゴンザレオ、ハルフダー館長、ヨーロッパライデン博物館のGer, Van Wengen先生もなごりおしいと云って盃をあげていました。またお会いできるにちがいないのですが、こんなに沢山のアメリカの会員たちとは、次回は会えないかも知れません。日本からの会員が少ないことは何としても残念でなりません。メキシコの博物館の若い学芸員さんたちが近よってきます。握手を求め、再会を約束します。マリアッチのひとときは軽快なメロディが私たちを魅了させます。

大会終了後は、メキシコ・シティの動物園や、ソチミルコ、友人をたずねての小旅行の後、成田へは11月7日夜戻ってきました。

（日本モンキーセンター　学芸部長）

国立人類学博物館
（Museo National de Anthropologia）は1階が考古学部門、2階が民俗学部門にわかれている。古代メキシコ諸文化の考古学遺品の数量の多さとその形状の大きさにも驚かされるが、博物館展示室もすごくでかい。建物面積は44,000㎡と聞く。

ガラス越しに内庭の屋外展示が見学者の目をひく、実物資料をいかに効果的にみせるか、一点一点、そして全体のみせ方にこまかいデザイナーの配慮と、研究者の研究成果の上にたった展示主張が、横溢していた。そして見学者のつかれをいやす工夫にもみちみちていた。誰にでも満足のいく博物館というものの秘密をみた感じがする。

表紙写真

注口土器　縄文晩期

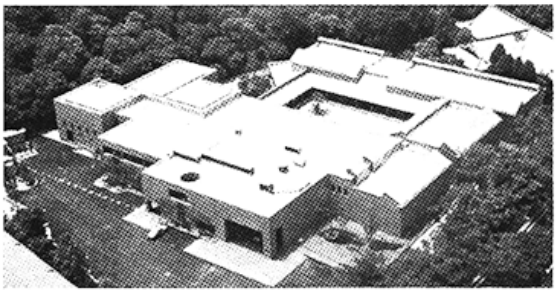
荒木　実

愛知県出土の縄文土器に会えるのは珍らしいのに、しかも完形品ではないか、私は直ちに購入することに決めた。県内における急須形の注口土器の出土例は昭和5年に、故吉田富夫氏が西尾市八王寺貝塚で縄文後期の磨消縄文の発見発掘したのみで、その後報告を聞いていない。それから数日後、このものの出土状況を知りたいと願い、手ばなした人を尋ねて行く。発掘された老人は故人となっておられたが、故人の老友に会うことができ、発掘地点“愛知県安城市古井町竹が花”に共に立ってお話を受承ることができた。

当時は現在より1m位高く畑面になっていた。現在の田面まで土取工事が行なわれた時に、田面より約60cm位の所にねば床（黒土）があり、その中よりこの注口土器の他に少量の土器片が出土した。更に60cm位の下には真砂の層が見られたと、現在は矢作川の堆積砂層の上に広大な水田が開かれており、この辺一帯の水田の土の中に弥生、須恵、山茶碗に至る小破片が所々に散布している。又西方の台地上には桜井古墳群が数基南北に並んでいて古代より連綿と続いている豊沃な土地であることは遺跡の大きさを物語っている。

この物については、高さ77mm、上部口径67mm、胴径122mm、横全長140mm、小形であるため完形に近い姿で（一点のみ欠けている）出土している。微砂質粘土で焼しめられており、チョコレート色を主体に所々に黒くくすぶりむらになっている。表面は研磨によって光沢があるが、洗い過ぎて艶は半減している。東北地方の亀ヶ岡式土器に見られる文様で縄文は全々見えない。更に細分して行くとC字文が中央に見られ、上下段には羊歯状文が横に連続している大洞BC式と考えられ、縄文晩期中葉と推定される。　〈荒木集成館館長〉

事務局だより



奈良県立橿原考古学研究所　附属博物館

○11月5日・6日と愛博協主催の県外研修会を奈良にて開催しました。参加者が8名と、少なかったのが残念でしたが、参加者からは有意義な催しと好評を得ました。

○第1日目は、奈良国立博物館で集合し、奈良博の稲垣学芸課長による講演「正倉院展について」を1時間ばかり聞き、ついで「正倉院展」を見学、さらに興福寺国宝館に於て奈良時代の仏像等を見学しました。第2日目は、近鉄奈良線〈学園前駅〉近くにある大和文華館の施設見学および特別展「富士の絵」を鑑賞しました。特に施設見学では、同館の成瀬次長の案内による収蔵庫の見学を中心としました。午後からは、10月に新館オープンしたばかりの近鉄畝傍御陵前にある奈良県立橿原考古学研究所附属博物館の施設見学をしました。ビデオテークシステムや新しい展示方法は、非常に参考となりました。

○4月7日に常滑市民俗資料館が開館します。考古・歴史・窯業民俗資料など3,000点余を収蔵し、「常滑の窯業のあゆみ」をテーマに展示。詳細については、次号で紹介します。

「愛知の博物館」　No.29
発行日　昭和56年3月
編集・発行　愛知県博物館協会
名古屋市東区東桜一丁目12番1号
愛知県文化会館内
TEL〈052〉971－5511